命に寄り添う力を磨く

～もっとやってみよう！　糖尿病のある方への支援～

◎中川 裕美[1)]
公益財団法人大原記念倉敷中央医療機構 倉敷中央病院リバーサイド[1)]

臨床検査技師は、「臨床検査」において命と向き合っている。数値や画像へのこだわりはどの職種よりも強く、検査結果に付加価値を付けて臨床に報告するということはとても重要なことである。しかし一方で患者さんに対してどのように伝わっているだろうか。

【臨床検査技師が行っている治療支援と診療報酬】

多くの病院で臨床検査技師による糖尿病教室への参画や検査説明を含む個別支援、SMBG の説明・POCT 対応機器の管理、持続グルコースモニタリング（CGM）の装着・説明・データ解析など行われている。他の職種のように具体的に食事や薬、運動などの支援はできなくとも、検査結果で客観的に自分の状態を振り返っていただき、他職種と違う別の角度からアプローチすることができる。このアプローチの中で、単に検査説明をするだけでなく患者さんとの会話の中から、「何に興味を持っているか」「どうなりたいと思っているのか」などを察知し、気持ちに寄り添いながら行動変容につなげていくということが大切である。

しかしこのような治療支援に対して診療報酬での評価がない現状である。そのためか人員の問題などを理由に支援に関わっていない施設も多い。保険点数がつかないから治療支援ができない、というのではなく、臨床検査技師による支援が必要だと認識していただける状況をつくることが大事ではないかと感じる。

【これからの治療支援】

今後、糖尿病治療支援の場が大規模病院から小規模病院さらに在宅を含めた地域へ移っていくと見込まれている。これからデジタルヘルスケアが進んでくるであろう。身近なところでは CGM データのクラウド管理などがある。また地域包括ケアシステムにおいて、画像を含めた検査結果の共有化が進み、他院で実施された検査結果を見て支援する場面が増えてくることが想定される。この場合においても電子カルテ上で見る検査結果には、その結果に至る背景や患者さんの想いがあることを忘れてはならない。

また、糖尿病のある人は、誤った知識や社会的偏見でスティグマにさらされていることがある。スティグマとは「不名誉な烙印」を意味しており、「糖尿の人は食べ過ぎ」とか「糖尿病になると透析になる」などと決めつけることである。医療者からもこのような発言を耳にすることがあり、考え方を変えていく活動が必要であろう。

【もっとやってみよう！】

検査説明やタスクシフトで臨床検査技師も患者さんに接する機会が増えてきた。患者さんに的確な治療支援を行うには、常に新しく正しい知識とコミュニケーションスキルを身につけることが必要である。

CDEJ(Certified Diabetes Educator of Japan)日本糖尿病療養指導士は、糖尿病治療にもっとも大切な自己管理（療養）を患者に指導する医療スタッフで、高度でかつ幅広い専門知識をもち、患者の糖尿病セルフケアを支援する資格である。2023 年 6 月現在、全国で 18,012 人、うち臨床検査技師 1,219 人が資格取得している。（日本糖尿病療養指導士認定機構ホームページより引用）

多職種連携によって臨床検査技師だけでは気が付かない力が「創造」されることがある。資格がなくとも治療支援は行えるが、検査以外の視野を広げ「命に寄り添う力」を磨くために、資格を取得し維持していくこともひとつの方法ではないかと考える。

連絡先：086-448-1111(内 201)